

はじめに

金子守恵

京都大学アフリカ地域研究資料センターは、2010（平成22）年度京都大学全学経費をうけて、国際共同研究「アフリカ研究はアフリカの危機にどう対処するか（Role of African Area Studies for “African Crisis”）」を全7回にわたって開催した。本書はそのうちの第7回国際フォーラム「アフリカにおけるジェンダーを基盤とした知識と技法（Emerging Approaches to Understanding Gender-based Knowledge and Techniques in Africa）」の成果の一部である。第7回フォーラムは、当初、海外からの招待講演を含む口頭発表6題と、若手研究者によるポスター発表11題でプログラムが構成されていたが、2011年3月11日におこった東日本大震災のため、同年3月26日にポスター発表のみを実施した。延期された第7回フォーラムは2012（平成24）年2月24日に実施された（その成果はAfrican Study Monographs Supplementary Issue 46として公表されている）。

このフォーラムでは、アフリカの人びとがつかってきた工芸品に代表される「もの」やそれをつくる知識と技法を主な対象とした。ものづくりの知識や技法にとつて、地域の外から流入する工業製品や、それによって生じるさまざまな変化をひとつの「危機」と措定したうえで、これまで地域の内部で培われてきた「もの」をつくる知識や技法が社会的な性のありかた（ジェンダー）といかに関連しながら変化したり、創造されたりしてきたのかを議論の中心にすえた。一方、ポスター発表では、前述した問題設定のなかでも、アフリカの人びとの生業活動や日常生活にまで対象をひろげて、そこでみいだされるジェンダーを基盤にした知識や技法の実践に注目した。

ポスター発表ののちにおこなわれた総合討論では、男性／女性というカテゴリーの社会的側面に注目することの有効性を疑問視する意見もあった。この背景として、ジェンダーが、調査地でみいだされるさまざまな課題を理解する際に、第一義的なカテゴリーとはなりえていないことを指摘できる。「もの」や人の移動が盛んになり、情報ネットワークが急速に発展している現代において、これまで注目をあつめてこなかった人びと（たとえば、少数民族、障がい者、高齢者など）に対して、カテゴリーがあたえられ、それが実体化しはじめている。そういった外部社会とも密接にむすびついているあらたなカテゴリーにとって、ジェンダーが、人びとの実践や社会的な状況を理解するうえでより意味のある有効な枠組みとなるのか、総合討論のなかで指摘された疑問は、ジェンダーを基盤にして研究をすすめることの困難さと現場でおこっていることの複雑さを示している。

本書の執筆者は、アフリカ地域研究を学ぶ大学院生として長期間にわたってア

フリカの各地でフィールドワークを経験している。ジェンダーに関わる事象を研究テーマの中心にすえてきた者はほとんどいないが、フィールドノートに人びとの日々の行動を記録する際に、社会的な性差にまつわる事項を書き加えることは不可欠であったと想像できる。今回の論敲において、執筆者はそれぞれの地域において社会的な性差がどのように生成されているのか、その実態を把握することにつとめている。このアプローチは、男性／女性に限らず、所与のカテゴリーを想定して、その社会的な役割を把握しようとするのではなく、人びととその集まりがおこなうことがどのような状況において実現しているのか、その行動を人と人、人と「もの」、人と環境との関係性において理解しようとする在来知の考え方もむすびついているといえるだろう（本書「ZAIRAICHI 創刊によせて」を参照）。

5人の執筆者は、それぞれが半年以上にわたって調査地にくらす人びとと生活を共にする参与観察をおこない、現場の状況にあわせて創意工夫をかさねながら日々の行動記録を試みている。

野口（5～13頁）は、エチオピア南部にくらす農耕民を対象に、活動量を計測する器具をもちいて高齢者の運動量を記録すると同時に、高齢者の日常生活活動を医学的に評価する項目（ADL）を、現地の状況にあわせて改変したうえで聞き取りと観察調査をおこなった。その結果、高齢者が社会的弱者として一方的に施しをうけているわけではなく、年齢、社会的な地位、社会的な性、身体的な能力、土地の面積など、さまざまな点で差異をもちあわせた近隣の人や親族と双方向的な関係をきずきながら生活を営んでいることをあきらかにしている。

山科（15～23頁）は、ナミビアにおけるアリ塚の分布やその形態を記録するとともに、人びとからアリ塚の利用について聞き取り調査をおこない、彼らのアリ塚利用の実態を描きだしている。人—昆虫—自然環境の三者の関わりのなかで、人びとは、アリ塚の形態や状況にあわせて採取したり、建材などとして利用したりすることで、結果としてアリ塚の持続的な利用を可能にしている。この採取作業自体は、女性の仕事だが、子どもたちもその作業に関わっており、男女にかかわらず幼少のときから、アリ塚に関する知や技法を継承することが可能になっている。

板垣（25～33頁）は、エチオピア各地で伝統的に製作され、着用されてきたアムハラ布について、主に男性の織師に注目してその技術的な変異を描きだしている。筆者本人が織作業に従事していることもあり、道具や作業手順の詳細な記録がこの論敲の中心的なデータとなっている。刑務所など公的な場において囚人たちが服役中の労働としての織作業に従事することにより、あらたな男性の織師が誕生しつづけている一方で、女性の織師は非常に少ない。このことは、織りに関する知や技法が障壁になっているというよりも、社会文化的な背景が強く作用している可能性を示唆している。

神代（35～44頁）は、ブルキナファソの地方都市で活動する女性グループが、外部資金によるマイクロファイナンスを利用しながら、グループを発展させていく経緯を記録している。この地域には他にも多数の女性グループがあるが、彼女が対象にしたグループは、ほかとくらべて自立的に運営できている。資金の借入額の増加は、このグループが外部組織と交渉する力を増してきたことを想像させる。経済力と交渉力をかねそなえるようになった女性たちが、コミュニティにおいて、どのような役割を創りだし、周囲の人びとと社会的な関係を取りむすんでいくのか、今後の報告が待たれる。

南（45～52頁）は、エチオピア南部の農村女性が利用する台所用具に注目し、その保有と利用の実態についてデータを収集している。10年前に同様の方法で記録されたデータと比較しながら、「もの」の利用にみいだされる女性たちの知や技法の変化について描きだしている。

これらの報告からは、調査地において、人びとがそれぞれの社会的な性に関わって生きていることで、限定的に行動せざるをえない側面があると同時に、彼／彼女らの保持している知や技法が、社会的な位置づけを変化させる可能性があることも示している。5編の報告は、ポスター発表をもとにした短報ではあるが、対象とした人びとの行動や、人－「もの」－環境、相互の関わりを考えるうえで非常に示唆的なデータを提示している。

二一世紀に入ってもなお、我が国におけるアフリカに関するメディアの報道には、飢餓や紛争、病気、犯罪など否定的なイメージにつながるものがあとをたたない。本書に掲載した報告は、そのようなアフリカ・イメージを想起させる状況とはいっけんかけはなれた場所にくらす市井の人びとの生活像を提供しているようにみえるだろう。しかし、それもまた同時代のアフリカの現実であるということとは強調しておきたい。アフリカにおいてフィールドワーク（参与観察）をおこなうことは、アフリカが広大で多様であることを示すと同時に、人びとの生の多様性を理解する作法を示すことでもある。本書が、かの地に生きる「彼／彼女」らが、日常的に再編されていく知や技法をもとに日々のくらしをどのように営み、それと同時に、自分たちの性や生活を不断に創りだしつづけているかを示すことに、多少なりとも貢献することができたとすれば幸いである。